

Intellectus に 關 する 一 考 察

— アウグスチヌスを中心として —

仁 戸 田 六 三 郎

—

本稿は極めて主観的で獨斷的な私の立問を展開するものであつて諸賢の御高教を願うところのものである。アウグスチヌスは De Trinitate の第十四卷に於て Sapientia の本質を論じている。(Quae sit sapientia de qua hic agendum.) ところが彼はその Sapientia について二様の區別を試みている。第一は scientia との區別である。(De scientiae et sapientiae distinctione quid jam dictum.) 第二は神の Sapientia と人間の Sapientia その區別である。以上の如き區別を掲げることによつてアウグスチヌスは人間の Sapientia を論ずるのである。Sapientia Dei は quae procul dubio Deus est: nam sapientia Dei Filius ejus unigenitus dicitur. といわれるものである。之れに對して sed loquemur de hominis sapientia と言いつつ人間の Sapientia を論究しようとする。そしてこの人間の Sapientia を説明して彼は次のように言つている。

vera tamen secundum Deum est, et verus ac praecipuus cultus ejus est, quae uno nomine θεοσέβεια graece appellatur. (Cap. 1)

右の言葉の中から私が特に取り上げたいと思うものは cultus (θεοσέβεια) である。Sapientia は scientia から區別され、而して Sapientia hominis が Sapientia Dei から區別されている。そしてそれは cultus というものに歸結されている。私は先ず Sapientia hominis がアウグスチヌスに於て上述の如き過程によつて cultus に歸せられていることを問題にしたい。かくの如

き歸結は必ずしもアウグスチヌス独自のものではなく、既に同一思想が先在していたことは、アウグスチヌス自身上述の論述とその後の展開に於て出典を示していることから知られるのである。しかし、明確な自意識に於て論述的問題として命題化したことは一應アウグスチヌス自身に歸せられなければならないと思う。

何故に *Sapientia Dei* は神であり神の子であるのに對して *Sapientia hominis* が *cultus* なのであるか。この私の立問の意味はかゝる歸結に到達しなければならない必然性と、その必然性を方向づけたアウグスチヌス自身の意圖の包藏するものを問題にしているという意味である。

二

Sapientia は言うまでもなく知的なものである。しかし、それが最も本質的で純粹なるものである場合は、直接人間の所有にはならない。それはプラトンに於ける *αὐτὴ ἡ ἰδέα* とは一面相通ずるものではあるが、本質的には根源的には異質的なものである。ギリシャ哲學に於ては兩者を結續せしめるものとして *φιλοσοφεῖν* 乃至は *θεωρεῖν* が存在した。しかし、それは人間一般について可能なのではなく、人間存在の中の一部の人間即ち哲學者 (*φιλόσοφος*) にのみ可能であつた。一般には斷絶されたものである。アウグスチヌスに於ても上述の如く一つの斷絶が存在していることは否定出来ない。しかし、それは一面であつて、そのような斷絶的一面は同時にその反對な一面即ち直結する面が存在している。かゝる面の一つが *Trinitas* であつて、斷絶を定立する命題と同時に存在するのである。かゝる理論構造はギリシャ哲學には元來存在し得ないものである。かゝる *Trinitas* を根源的な前提とすることを意圖的内包とすることに於て *Sapientia* が語られていることを忘れてはならない。この問題は別にそれ自身重要なものであるが、此處では本稿に關連する限りに於て考えたい。かゝる志向性に基いてアウグスチヌスの所論を左に掲げよう。

Saepe autem diximus inseparabilia opera esse Trinitatis, sed singillatim commendandas fuisse personas, ut non solum separatione, verum etiam sine confusione et unitas intelligatur et Trinitas. (Tractatus in Johannis Evangelium XCV₁)

右の如き inseparabilia opera 及び unitas はギリシャに於ける *μαντική* とは本質的に異なることは言うまでもない。*μαντική* は或いは *divinatio* と譯されるが(例えばケケロの *De Divinatione*) 寧ろ心理的なものであつて、少くとも神學的乃至論理的なものではない。かくの如き一面を所有しつつ *Sapientia hominis* は *Sapientia Dei* と區別され、兩者の間には一種の斷絶が存在するのである。かくの側面に於ける人間側の *Sapientia* は *cultus* なのであるわけであるが、かくの如く考える必然性について考えてみたい。アウグスチヌスは更にこの *cultus* はギリシャ語に由來するものとし、これを彼自身の名辭として次のように示している。即ち

Quod nomen nostri, sicut commemoravimus, volentes et ipsi uno nomine interpretari, pietatem dixerunt, cum pietas apud Graecos *εὐσέβεια* usitatus nuncupetur: (De Trinitate. Lib. XIV. Cap. I)

この立言から考えると *Sapientia hominis* は *pietas* ということになる。私はかくの如き意味に於ける *pietas* 自體を究明せんとするものではなく、それが本性上人間の *intellectus* に必然的な關連性を持つ點を考察し、而してその必然性に中世思想を見るのみならず、宗教形而上學に於ける人間知性の本質を洞見せんとする課題の一つとするものである。前述のアウグスチヌスの立論よりすれば *Pietas* は人間存在の様相を意味しながら之を規定するものゝ如くでもあり、従つて倫理的基調を包藏するものゝ如くである。勿論それは當然というべきであるが、同時にそれは論理的なものであることを此處では明示しなければならない。アウグスチヌスが先の書に於て *Sapientia* と *Scientia* を區別した所以は端的に論理的なものではないことを意味するものであるが、同時にそれはまた端的に倫理的なものとな

いことを意味するものである。近世認識論の哲學に於ける論理は、一般的には體系論に論理を倫理から區別するのが常である。かゝる區別は私見によれば近世哲學の知性が自然物と自然法のみを認識論に於て考えていたためであると思われる。かゝる知性はスピノザの *Tractatus de Emendatione Intellectus* の所論に見られる如きものであろう。或いはまたカントの倫理學は *Vernunftphilosophie* の體系に所屬するものであるが、道德律を自然の因果の法則から解放された世界に考えた点に於て超自然法的世界であるとも考えられるかも知れない。しかしカントの *Vernunft* はその *Religion innerhalb der Grenzen der bloßen Vernunft* の主張に示されている如く、[・]端的に人間的な *Vernunft* に終始する限りに於て、其處に於けるカントの神概念は *revelatio divina* による神とは全く無縁である。之れを要するにカントに於ける *Vernunft* も *Verstand* も最も人間的であると考えられるが、かゝる人間性を規定する法は何れも非人格的な概念態に過ぎないのである。人間を自然法から峻別する[・]自由は、それが由來する根源はカントに於ては非自然であると共に非人格である。

私はカントを此處で批判するものでもなく、またカント哲學を解明せんとするものではなく、たゞ右の如きカントを一例とする近世哲學は體系論的に知性的なものを感情的なものと峻別していること、従つて認識論と倫理學は全く別個の存在として其の體系に所屬していることを示したいのである。比較的 *pietas* に近い *Achtung* はカントに於ては *Gefühl* としての場を持つてゐるに過ぎないことでも知られるであらう。(勿論カントをかく論ずることは輕卒でもあり、少くともカント學者から非難されることは必然であらうが、今は假りにかく論じておく。)

啓示による人間存在は自然を場とする人間存在と本質的に異なることは言を俟たぬ次第であるが、人間の智が *pietas* であるという命題は要するに人間存在を啓示による存在であるということに基いているからである。かゝる場に於ける人間の知は自然法的論理と思辨によつて純化され得るもので

はなく、人間存在乃至實存自體である意味に於て、同時的且つ同體系的に知以外の諸要素でもあり得る一面が定立されているのである。cupio Deum scire とアウグスチヌスが言っているが、この場合 scire という知の作用は cupio という謂わば情意的作用と同格同値であるとも言い得るのである。そこには知を通しての自然法乃至非人格法が問題なのではなく、persona が常に問題にされているからである。

三

Sapientia hominis が pietas であることは自然的論理に基くことでないことは右に述べた通りである。この面を更に問題にしてみるならば pietas と或る意味に於て必然的な関連を持つものとして laudare を取り上げなければならぬと考えられる。蓋し或る意味では人間に於ける laudare は pietas を前提とすることによつて可能であるからである。アウグスチヌスは Confessionum の冒頭に於て Magnus es, domine, et laudabilis valde: と言っている。而して次に示す如く laudare は更に種々なるものに関連することをみる。

et tamen laudare te vult homo, aliqua portio creaturae tuae (ibid)

この言葉から考えてみると laudare は人間の意欲から發するものであるが、しかし、かゝる意欲を持つ人間自體が神によつて創造せられたものゝ一部分に過ぎないのである。かゝる前提の本質的規定による人間存在である意味での人間なのである。従つてかゝる意欲は本來人間にとつて根源的にアプリオリであるのではない。tu excitas, ut laudare te delectet, quia fecisti nos ad te... といえる如く laudare は勿論人間の行うものであるが、根源的には神が人間をしてかくせしめるものである。而してこの laudare は invocare に関連してくる。これも laudare が pietas を或る意味に於て前提としているように invocare は laudare を前提としているようにも考えられる。しかし、これについては左に示す如くアウグスチヌスは彼特有

の問題を提出している。

da mihi domine, scire et intellegere, utrum sit prius invocare te an laudare te, (ibid)

右の立問は *laudare* と *invocare* との何れが根源的であるかということである。それ故先に私が記したように *laudare* が *invocare* の根源であると端的には断言出来ないかもしれない。問題はそれのみではない。この問題は *scire* と *intellegere* の志向的対象となつていゝることを見落すことが出来ぬ。即ち知が *laudare* と *invocare* を志向性に於て所有する意味に於て関連性を持つていゝるのである。而してかゝる志向的関連性は次に知そのものが *invocare* と関連して問題とされるのである。即ち *et scire te prius sit an invocare te* と續けていゝるのである。この言葉は先の *da mihi, domine* にかゝるものであることは明白であるが、假りに *laudare* を中心として考へてみるならば、その前後に *invocare* と *scire* との両者が問題にされていゝると考へられるであらう。勿論上述の *scire* も *intellegere* も人間自體に根源的な作用として語られていゝるものではなく、*da mihi, domine*、とある如く神的なるものに與えられるべきことであることは論を俟たぬ。従つてこの命題も既に一つの *invocare* であるとも考へられる。それは一應別として、*invocare* がかくの如く *scire* との関連に於て問題にされ、そしてかゝる問題が知の問題として更に展開されていゝることは本稿に於ける私の立問に深い關係があるように思われる。即ち

sed quis te invocat nesciens te?

an potius invocaris, ut sciaris?

と二つの命題を定立していゝるのであるが、この二つは夫々全く異つた内容と立場を有するものであり、或る意味では二律背反的な性格を相互に包藏するものの如く考へられないでもない。勿論かく考へられる可能性の根據は或る一つの立場と解釋に基く限りに於てゝあつて、普遍的な意味に於てゝはない。しかし今は假りに上述の解釋によつて考へてみたい。かゝる

場合先ず二つの立言の第一の方は *invocare* は既にその対象についての知を前提としていることを意味していると思われる。而して第二の立言はその逆であつて、知られんがために *invocare* されるが故に知がその目的となつている。この場合 *invocare* という同一作用を中心として相互に矛盾する命題が示されているようでもある。前者は *invocare* はその対象についての知を前提とし、後者はかゝる前提が存在しないがために行われるとする。即ち前者は知の存在を、後者は知の非存在を前提としていると考えられる。この意味からすれば兩者には相互に矛盾するものが内在しているようである。しかも兩者は同一作用 *invocare* について言われているのである。

そこで私が更に問題にしたいことは、*sapientia hominis* が *pietas* という一見知性的ならざるもののように思われるものとして規定されているものが、*laudare* から *invocare* に結續する意味に於て、上述のアウグスチヌスの立問が何を意味するかということである。私はそれを二律背反的であると言つたけれども、それはそれらの文體が示すように決して定言的な命題として斷定されているのではない。寧ろ正確には問の形に於て立問されているのである。かくの如き意味に於ての二律背反的なものが内在すると言つたのであるから、或いは二律背反とは言い得ないと思う。しかし、それにも拘らず私がかく稱したのは、これらの立問が *da mihi, domine, scire et intellegere* という謂わば知の問題になつているからでもある。

そこで、その知の問題であるが、私見によればその知は近世哲學の認識論に於ける知と本質的に區別されなければならないことは既に示した通りである。スピノザの悟性改善論 (*Tractatus de Emendatione Intellectus*) の意味する改造は上述の中世思想の知に對してあり、またデカルトが自然の物を認識するように神を認識すると *Méditation Métaphysique* の序文で言つている理性も中世思想の知性に對してのものである。即ちアウグスチヌスに於ける知はスピノザやデカルトに於ける如く自然的存在を對象と

するものではない。laudare と invocare の対象が te 即ち二人稱單數の人格態であると同様に scire と intellegere がこれら兩者と上述の如き關連性を有する意味に於て同様に te を対象としているのである。従つて問題は自然認識では超自然的存在者の認識である。自然的存在は之れに反して無數的不特定であるが、アウグスチヌスの此の場合は單數特定の非自然的な人格存在である。この意味に於ける在り方は所詮認識論上のものではなく、問題は少くとも宗教形而上學に於ける知の問題となる。

四

右の如く謂わば非自然的超自然的知性は先ずその志向性に於て自然的知と本質を異にしている。トマスも Summa Theologica (第一部第一章) に於て Oculus non vidit absque te という聖書の言葉を引用している。この眼は勿論醫學的な眼即ち Oculus carnis 自體を意味するものではない。自然を対象とする認識は肉體的感性が自然法的な意味に於て條件になる。例えばカントの先驗的感性論である。またデカルトに於ける懷疑である。勿論宗教形而上學は肉體自體を無視するものではない。肉體はかゝる場合精神から峻別されると同時に非自然的なるものによつて包攝され肯定される。(この點については私は嘗て宗教學研究第一卷に「宗教に於ける二律背反的なるもの」と題して論じておいた。) しかし此の場合は知性は自然認識でないという基本的な線に於て考えられなければならない。かゝる場合の知は感性的雜多乃至は時間空間等には原理的に無縁である。アウグスチヌスはかゝる知による認識と肉體的な眼による認識を次の如く區別し、その相違點を論じている。

Quamvis enim videant homines oculis suis, non tamen vident oculos suos. Oculus carnis alia videt, se non potest; intellectus autem et alia intellegit, et seipsum. (Tractatus in Johannis Evangelium. XLVII₃.)

かくの如く intellectus は他を知り且つ自己自身を知るものである。肉

の眼 (oculus carnis) は他を見ることが出来ても、自己を見ることは出来ない。これは要するに一つの比喩に過ぎないであろうが、しかし、知の志向性と方向性を規定する重要な意圖が内在しているのである。それは右の文の直後に、*Quomodo intellectus videt se, sic et Christus praedicat se* とあることから知られるであろう。かくの如く知性は *per se* の能力を所有するものであるが、何等かの必然性を以てそれは *te* を目的對象とする *invocare* に關連することを忘れてはならない。

右のような本質的性格に基く知性はそれ故上述の如き意味に於ける志向性を持つものである。かゝる知が追求して自己を認識した結果についてはアウグスチヌスが前掲の *Confessiones* 第一卷第一章に於て次の如く示している。

Invocat te, domine, fides mea, quam dedisti mihi...

これは自分の *fides* が主を *invocare* するものであり、その信仰は主が自分に與えたものであることを意味している。ここではその思想自體もさることながら、この立言が先の立問の *scire et intellegere* の一つの結果であると考えたい。即ち *laudare & invocare* について知らんと欲する (*ut intellegere*) ことによつて知られるものは *fides* に他ならないのである。しかし、それは知の限界に達して然る後に信に行くという轉入の論理ではなく、かゝる論理は自然を對象とする知についてのことである。*quaeram te, domine, invocans te, et invocem te credens in te* とアウグスチヌスが述べているように、獨自の關連的持續展開によるものである。換言すれば知は既にその對象に向つての方向的意志決定を前提としているわけである。従つて *Nisi credideritis, non intellegetis* と言われ得るし、知はかゝる情況の再確認であるとも思われる。この意味からも知と信は必然的な關連を持つ。

Intellectus enim merces est fidei. Ergo noli quaerere intellegere ut credas, sed crede ut intellegas. (Tractatus in Johannis Evangelium.

XXIX₆.)

Non quia cognoverunt crediderunt, sed ut cognoscerent crediderunt. Credimus enim ut cognoscamus, non cognoscimus ut credamus. (ibid. XL₉)

右の説によつて知られる如く、知は信と必然的な関連を持つものであつて、これは結果的な意味に於てかくあるのみならず、その最も始源的な状態に於てかくあるのである。

以上の如く知を問題とすることは宗教形而上學に於ける知の本質的性格を明らかにしようとする私の意圖に基くものであるが、かゝる知がその始源的状態に於て如何なる在り方にあるかということが本稿の關心事なのである。而してそれが如何に展開され、而して如何に確認されるかということも勿論である。再びその出發狀況に立ち戻るならば *pietas est sapientia* という命題がそれを意味するのである。知の始源的な發動の時に於て本質的には既に一つの規定性が存在する。その規定性は今迄述べた如き志向性を根基として存在もし展開もするものであるが、それが場とするものは實態概念としての人間存在ではなく、宗教的存在としての人間存在である。この意味に於てかゝる人間に於ける知は純粹知性概念に還元され得るものではない。これを逆に考えてみるならば、人間存在が神に對する場合は知は *cultus* であり *pietas* であるということになる。

ἀρχὴ σοφίας φοβεῖσθαι τὸν κύριον (Siracides 1₁₄) という命題は人間に於ける *Sapientia* がその始源的な状態に於て如何なる在り方であることを明示するものであろう。而して *φοβεῖσθαι τὸν κύριον* はアウグスチヌスに於ける *θεοσέβεια* 乃至は *εὐσέβεια* であり、*cultus* 若くは *pietas* である。これで知られる如く、啓示宗教に於ける知は寧ろ他面心情的倫理に屬する如き規定性を持つものであつて、そこに人間存在が實態的に規定し得ないことを側傍的ながら物語るものである。この *φοβεῖσθαι* はアリストテレスの言う *θαυμάζεσθαι* と比較してみるならば本質的な相違がある。後者は端的な自然的受動性による心理狀況に過ぎない。

以上私は宗教形而上學の觀點から intellectus の本質的性格を探求せんとしたものであつて、勿論十分に意を盡したものではない。本稿はその部分的一面をアウグスチヌスに取材した試論に外ならぬ。最初に述べた如く私の主觀的な觀察であるから、正統的な立場から種々非難されるであろうが、今はその要點の一部を最も粗雑に述べた結果になつたようである。